



アジア太平洋地域の開発支援を担うアジア開発銀行（ADB）の駐日代表に2019年5月、児玉治美さん（51）が就いた。女性では歴代初。これまでも国際非政府組織（NGO）や国連人口基金（UNFPA）など、世界を舞台にキャリアを築いてきた。

日本での生活は18年ぶりです。01年にUNFPAに採用され、米国ニューヨークで暮らし始めました。08年に双子の男子

を出産。仕事と育児を両立しやすい環境を求めて、フィリピンのマニラに本部のあるADBに転職しました。

ADBは年間およそ160件の開発プロジェクトにかかわっています。交通インフラ整備やエネルギー、上下水道、保健衛生など対象は多岐にわたります。ただメインの活動はプロジェクトへの融資で、特に先進国などでは活動があまり知られていません。それでは融資に必要

仕事も育児も国境なし

アジア開発銀行 駐日代表 児玉 治美さん



18年ぶり日本で生活 男性優位の岩盤実感

① ②

な資金が集まりません。世界各国のメディアにどう情報を提供すればADBの知名度を上げられるか。広報戦略を立てて実施するのが、マニラでの私の主な役割でした。

ADBの駐日代表に就任したのは公募に申し込んだからです。マニラでのADB勤務は10年を超えています。今後のキャリアを考えたとき、同じポジションにとどまらず、次のステップに進む頃合いだと思っていました。ちょうどそのタイミングで公募があったのです。

日本に帰ってきたきっかけではありません。久しぶりに日本で暮らして感じますが、やはり日本では女性が働きづらい。18年前に比べると、確かに働く女性は増えましたが、男性優位がまだまだ目に付きます。「女性だから」と軽く見られる状況に今も直面します。

1968年に鹿児島市で生まれた。良妻賢母を女性に求める、封建的価値観に抵抗があった。

今も鹿児島は大好きです。海外で働いている時も毎年1〜2

回は帰省していました。人はゆったりしているし、自然は豊か。桜島を見ると癒やされます。

カラオケでは鹿児島民謡「おはら節」が定番です。「花は霧島 たばこは国分。燃えてあがるは オハラハ桜島」。ニューヨークやマニラ、世界のどこであろうと、ひと節、歌うと心が穏やかになります。

実家は代々続いた商家。しきたりや礼儀作法など伝統を重んじる家庭環境でした。薩摩藩の家老がかつて住んでいたという日本家屋に、祖父母と一緒に暮らししていました。毎朝夕に祖父母が暮らす母屋に出向き、正座で三つ指突いてあいさつします。「おじい様、おはようございます」「おばあ様、先に休ませていただきます」

幼い頃はそうした暮らしが当たり前と生きていました。でも小学校4年の時、父の仕事の関係で米国に両親と2人の妹の家族5人で一時引っ越しました。性別による役割分担とは一線を画す、まったく違う文化を知りました。それ以来「女性は黙って男性を立てればよい」とする日本の伝統的価値観がとても窮屈に感じるようになりました。（編集委員 石塚由紀夫が担当します）

小学校4〜6年を米国ミシガン州で過ごし、鹿児島とまったく異なる環境にカルチャーショックを受けた。

父は当時、鹿児島大学病院に勤務する心臓外科医でした。国から奨学金を得て、先端医療を学ぶために2年間米国研修に行くことになったのです。母と私、2人の妹も同行しました。

英語がまったくできないのに、いきなり現地の公立小学校に転校。最初は授業に出てもち



ンパンカンパンです。でも私はまだ9歳と小さかったので、習得が早かったのでしょうか。仲の良い友達ができて毎日一緒に遊んでいるうちに、半年ほど話せるようになりました。

驚いたのは学校での教え方の違いです。日本では先生の言うことは絶対。授業は暗記重視で、教科書をそのまま覚えさせられました。

でも米国では「人間の体はどうなっているのでしょうか？」

仕事も育児も国境なし ②

アジア開発銀行 駐日代表 見玉 治美さん

自分で調べて発表してください」と課題を出します。生徒はおののけ心にしたがい、図書館で調べてレポートを書いたり、模型を作ったりします。自ら考えて表現する。主体的に学ぶ楽しさを知りました。

もともととは教室で黙って座っている内気なタイプでしたが、米国の学校で学んだことでガラリと変わりました。当時の日本の学校では、体罰も当たり前のようがありました。先生の言うことを聞かずに往復ビンタを食らった私が、「野蛮人！ 米国だったら裁判に訴えられますよ」と言い返し、先生を泣かせ

米国の学校で「変身」 帰国後なじめず家出



米国ミシガン州の高校に留学した（写真は卒業式で級友と、左が見玉さん）

てしまったこと
もあります。

鹿児島は特に
管理教育が厳し
い土地柄です。

自己主張する私
のような存在は
生意気に映った
のでしょうか。「前

髪が長い」「ス
カート丈が長
い」。先生に目
を付けられ、わ

ずかな校則違反
でもきつく叱ら
れました。高校
に進んでも居心

地の悪さを抱え

たままでした。

高校1年の夏に我慢も限界に達し、家出を敢行する。

中学校の成績は良かったので地元の進学校、県立鶴丸高校（鹿児島市）に進みました。自由な学風を期待していたのに、ここでも女子生徒には「良妻賢母であれ」と教えていました。

学校を窮屈に感じていたところに、父から「医者になれ」と命じられました。自分の跡を継がせたかったのです。ありのままの自分が許されない現実。でも、どうすればよいか分からない。ある夜、衝動的に福岡市に逃げました。

行き当たりばったりの家出です。具体的な計画はありません。博多駅前の安宿に潜伏し、3日に警察に見つかってしまいました。翌日迎えに来た母は、鉄格子の中で保護されている私を見て大粒の涙をポロポロ流し続けました。

家に連れ戻すだけでは何も解決しないと、両親は悟ったのでしよう。手を尽くし、かつて暮らした米国ミシガン州に受け入れ先の高校を見つけてくれました。私は鶴丸高校から転出。米国留学によって、自分の居場所をようやく見つけることができました。



米国の高校に通うなかで、国際政治に関心を持つ。大学進学で日本に戻ったが、国際政治の勉強を続けた。高校は米国ミシガン州にある進学校で、寮もあり世界中から生徒が集まっていた。当時は米ソの冷戦構造が崩壊する直前。英国、ドイツ、ギリシャなどさまざまな国籍の級友と世界の行く末を議論しました。

米国の大学も受験しましたが、両親に「大学は日本で卒業

したら」と言われ、国際基督教大学（ICU）に入りました。そもそも日本から米国の高校に転入したのは、父に医者になれと命じられ親子関係がこじれたのが一因。大学の選択は自由にさせてくれたので、帰国をためらう理由はありませんでした。

ICUでは大学院まで進み、模擬国連に打ち込みました。それぞれの学生がどこかの国の代表になりきり、国連総会さながらに主張をぶつけ合います。図

仕事も育児も国境なし

③

アジア開発銀行 駐日代表 見玉 治美さん

書館で実際の国連文書を探しだし、必要なら大使館にその国の方針を尋ねました。私はパレスチナ解放機構（PLO）やアフリカ民族会議（ANC）、フランス政府などの立場から、紛争解決の道筋を考えました。

大学院修了後は、堂本暁子参院議員（当時、社会党から新党さきがけ）の政策担当秘書を務めた。

国際問題にかかわる仕事を探していました。堂本議員は環境やジェンダー、人口問題など幅広い分野で活動していて、国際的な政治活動に携われると思っただけです。

国連や各国政府、国際非政府組織（NGO）などの意見調整に奔走する堂本議員をサポートしました。短い文でも公式な宣言文や行動計画に盛り込まれ

国際問題の解決志す 議員秘書で計画立案

れば、各国政府の施策を縛ります。反対意見を調整し落としどころを探るロビー活動は、国際問題の解決に欠かせません。1994年にカイロで開かれた国際人口・開発会議の行動計画立案にかかわるなど、貴重な経験を積みました。

落とす女性は世界で珍しくありません。ジョイセフは彼女らを守るため、主に途上国で啓発教育や人材養成、コミュニティーづくりに取り組んでいます。

私はカリブ海の西インド諸島の国、バハマで「思春期保健プロジェクト」の立ち上げを任せました。避妊やエイズウイルス（HIV）の感染予防の知識を青少年に広げるのが目的です。同国ではHIV感染に加え、10代前半に妊娠・出産して学校教育から離れていく女性が後を絶ちませんでした。

「バハマで仕事」と言っと、うらやましがられたものです。青い空と海がどこまでも続くリゾート地のイメージが強いからでしょう。けれども仕事は苦勞続きでした。



ジョイセフ時代、バハマで現地スタッフとともに（左から3人目が見玉さん）

ただ一度は現場で働いてみたいと思うようになり、97年に国際NGO「ジョイセフ」に移りました。望まない妊娠や衛生問題で命を

バハマはキリスト教を厚く信仰する国柄で、大人は子どもたちに禁欲を説いています。性体験を前提にした教育なんて認められるはずありません。必要性を粘り強く説いても現地スタッフは渋ります。「信仰に反する」と次々と辞めていきました。でも結果的に、それが奏功しました。現実的に問題に取り組みうとする進歩的なスタッフに入れ替わり、プロジェクトは2年目から軌道に乗りました。

国際非政府組織（NGO）「ジョイセフ」での活躍が目にと留まり、国連人口基金（UNFPA）から「うちで働かないか」と誘われる。

国連で働くのは夢でした。バハマの仕事が一区切りした2001年に転職しました。UNFPAは世界の人口問題の解決をめぐり、各国の政府や議員に支援を働きかけるのが私の役割でした。

ただ人口問題はデリケート



で、宗教的に人工妊娠中絶に断固反対の人も多くいます。UNFPAは中絶を推奨していませんが、誤解から誹謗（ひぼう）中傷にさらされています。私の転職直後にも、いきなり逆風に見舞われました。

01年に米国でブッシュ政権が発足。保守層の支持を背景に拠出金を止めてしまったのです。これにより多くの妊産婦と乳幼児の命が危険にさらされます。根拠のない決定に、私は強い憤

仕事も育児も国境なし ④

アジア開発銀行 駐日代表 見玉 治美さん



仕事と育児の両立のため、マニラに本拠を移した（10年、自宅で家族と）

NYで夢の国連勤務 家政婦求めマニラへ

りを覚えしました。ほかの国にも広がったら大変なことになる。すぐに、米国を含む各国の国會議員にUNFPAの活動現場を見てもらおうと考えました。

一例が途上国での分娩キットの支給です。出産時に赤ちゃんが地面に触れないように母親の下に敷くビニールシート、消毒用のせっけん、臍帯（さいたい）を切ったり結んだりするカミソリと糸。一組わずか1ドルですが、これだけで多くの母子が命を落とさずに済むのです。

主要国の国會議員をサンビエラやチャド、エチオピア、ブラジ

ルなどに視察に連れていきまし。残念ながら米国はブッシュ政権である間、ずっと拠出金はゼロでしたが、視察に参加した各国議員は自国政府に積極的に働きかけてくれました。ほかの国々が拠出金を補ってくれて、活動は救われました。

08年にUNFPAを辞め、アジア開発銀行（ADB）に転じる。きっかけは出産だ。40歳を間近にして子供がほしいと思うようになりました。年齢的に自然妊娠を待っていただけません。付き合っていた男性に相談のうえ体外受精を行い、結

婚もしました。問題は仕事と子育ての両立です。当時暮らしていたニューヨークの家賃は月4千が、ペビシッターを雇うとさらに月3千がかります。日本円にして月合計80万円近く。私の収入ではまかなえません。そこで転職先として浮上したのが、マニラに本部のあるADBです。

「家事と育児をまとめて任せられる住み込みの家政婦を簡単に雇えるので、仕事と両立しやすい」。UNFPAの元上司で、マニラに赴任していたことのある夫が教えてくれました。私より25歳上です。退職していたので、どこへでも付いてきてくれると言っています。

体外受精は成功し、双子の男子を授かりました。ほどなくADBの採用試験にも合格。マニラで生活を始めました。住み込みの家政婦さんを2人雇い、家事はすべて任せました。

息子の1人は自閉症です。2歳の時に軽いコミュニケーション障害があると診断されました。こだわりが強く、好きなことに集中すると周囲が見えなくなり。そんな彼がのびのび暮らせたのは、彼のことを理解し、温かく接してくれた2人の家政婦さんがいたからです。

人間発見

アジア開発銀行（ADB）の駐日代表に転じる際も、息子たちに日本でベストな環境を整えられるかに悩んだ。双子の息子の1人は自閉症です。就任が決まる前から、何度も来日して、彼を安心して任せられるインターナショナルスクールを探しました。受け入れてくれる学校が見つからなければ、就任を断念せざるを得なかったかも知れません。

「あそこは評判が良い」「ここは実績がある」。情報や噂を手掛かりに、十数校を回りました。ようやく決まったのは就任の内定直後の19年3月。「ここがダメなら日本での仕事はあきらめよう」。そう覚悟して最後に訪ねた学校でした。

マニラでお世話になっていた家政婦さんの1人にも、日本に来てもらいました。彼女とは10年以上も一つ屋根の下で暮らしてきました。「ハルミ」「ローレナ」と名前呼び合う間柄。

仕事も育児も国境なし

アジアドベ銀行 駐日代表 見玉 治美さん

⑤

2人の息子もローレナにとっても懐いています。

実はここ数年、夫の調子が良くありません。背骨の手術をきっかけに術後譫妄（せんもう）を発症し、アルツハイマー型認知症になりました。自宅に居るのに「帰る」と言って荷物をまとめ始める夫を上手になだめられるのは、家族同然のローレナだからです。彼女なくして家族

の生活は成り立ちません。ADB駐日代表にこれまでに

女性はいなかった。「女性初」と騒がれることに当初は違和感があった。

いまだに男性とか女性とか時代錯誤ですよ。でも日本ではそれが大きな意味を持つんです。18年ぶりに帰国して、相変わらずの男性優位社会であることを思い知らされました。

「女性初」に違和感も注目をプラスに転化



「ADBの活動を多くの日本人や日本企業に知ってほしい」という

取引先で会う相手は男性ばかり。あいさつ回りで名刺交換すると、多くの方がまず隣にいる私の男性部下に名刺を差し出しました。びっくりしましたが、女性初として注目してもらえらるなら、ADBを知ってもらうため積極的に活用していきこうと今は気持ちを切り替えました。

ADBは1996

6年の発足以来、アジア太平洋地域の開発を助け、人々の貧困を解決するために活動してきました。経済成長したとはいえ、いまだに世界の貧困層の3分の1以上をこの地域が占めています。ADBの役割はまだたくさんあると、日本の人々に知ってもらわなくてはなりません。

一方、ADBがかかわるプロジェクトは通信衛星の打ち上げや高速鉄道の建設など技術が高度化しています。日本企業が貢献できるプロジェクトもたくさんあります。こうした実情を日本企業に伝え、アジア太平洋の途上国と橋渡しするのも駐日代表の重要な役割です。

仕事を終えて帰宅すると、その日何をしたらか夫に報告しませんでした。認知症なので会話はなかなかかみ合いません。でも先日は「Harumi, I'm so proud of you!」（君を誇りに思っています）」と返してくれました。彼自身も国際問題の解決にかかわってきたので、私の仕事の重要性を分かっています。私は希望の仕事をしながら家族にも恵まれました。働く私を誇らしく思ってくれる夫と子どもたちは、かけがえない存在です。

（編集委員 石塚由紀夫が担当しました）